

子どもと担任の関係について —自身の「学級崩壊」経験をふりかえって—

田中 清明

(生徒指導力高度化コース第2期生)

1. はじめに

「学級崩壊」という言葉は、教師を志す学生にとって恐れを抱かせる言葉ではないだろうか。私も、学生時代に講義の中などで聞きながら、怖がっていた。しかし、怖いものだという感想を抱きながらも、これは能力の低い教師に起こる失敗例であり、自分は大丈夫であろうという楽観的な意識があった。その私が教師となり1年目、担任となった5年生の学級で「学級崩壊」は起きた。その頃の自分は、次々起きる事態に翻弄され、考える余裕がなかった。そして、結論から述べると、自身の学級はその状況から回復することはなかった。自分にとって、今でも心に残る苦い1年間である。現在5年目をむかえているが、今でも思い返し胃が締め付けられることがある。

本論文では、1年目の学級のことを振り返り、「学級崩壊」とはどのような状態をさすのか、そしてなぜ起きたのか、最後にどうすれば防ぐことができるのかということを考えていきたい。

2. 学級崩壊の定義

そもそも学級崩壊とはどのような状況を指すのだろうか。そもそも、学級崩壊という言葉が生まれたのは1990年代後半と比較的最近のことである。学級崩壊とは、学級経営研究会の報告書(2000)によれば、「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任による通常の手法では問題解決ができない状態に立ち至っている場合」である。「勝手な行動」とは、私語、教室の出入りを含む立ち歩き、直接的暴力を含む教師への反抗的言動などを指すという。梶間(2001)によれば、全国から抽出された公立小学校1154校のうち、校長の約4分の1、教師の約3分の1が自分の勤務校に学級崩壊があると回答している。どこか遠い教室の話ではなく、多くの学校で起きている極めて現実的な問題として考えるべきだろう。

学級崩壊は具体的な行為ではなく、学級の状態を指すものである。その上「勝手な行動」はどの程度を指すのかという基準も定かではないため、定義は非常に難しい。そのため、当時の学級の状態が確かに学級崩壊であったと断定することは難しい。私が1年目に担任した学級の状況が最も悪くなっていたのは、年度末である。その頃の私を悩ましていた行動は、教師反抗

であった。私が少しでも字を間違えると「教師失格」「教師やめろ」と罵声がとび、その子どもたちを注意すると「なんで俺らだけ」「意味分かん」と会話にならず、指示をしたことに対しては従わない、もしくはわざとゆっくりと行動することで反抗の意思を示してきた。教室を飛び出す子どもはいなかったが、小声の私語は当たり前のこととなっていた。また、メモ回しによる私や一定の児童に対する陰口が横行していた。中心となっていたのが、5名ほどの女子と、それに同調する男子数名であった。他の子どもたちは、なんとかしてほしいと思いつつ傍観している子どもが3分の1程度。自らは暴言を吐いたりしないが、何か起きるとニヤニヤしている子どもが3分の1程度。そして、積極的に教師への支持を示す子どもが数名であった。当然のこととして担任として、様々な取り組みを行い、立て直しを図ったが、その働きかけは届かず、他の教師のサポートに頼らざるをえない状態であった。先の定義に照らして考えると、十分に当てはまる状況にあり、当時の学級は学級崩壊していたといえるだろう。

当然ながら、「学級崩壊」と呼ばれる学級の中には様々な種類の学級が含まれている。学級の問題を詳細に分析せずにひとくくりにして考え、思考を停止させてしまうことは危険である。自身の学級を含めて、数種類の崩壊した学級を見ていると、そこには共通点があるように思う。その一つが発生原因である。

3. 学級崩壊はなぜ起きるのか

学級崩壊は起きてしまうのであろうか。片山（2009）は①教師の学級経営が管理主義的で子どもに何ら主体性をもたせない結果、子どもが反抗する場合②教師が子どもと友達間隔で接し、なれあいになってしまう場合、の二点を例に挙げて分類している。また、文部科学省は「いわゆる「学級崩壊」について ～『学級経営の充実に関する調査研究』（最終報告）の概要～」（平成12年3月）において、学級崩壊について10のケースに分類している。

- ケース1 就学前教育との連携・協力が不足している事例
- ケース2 特別な教育的配慮や支援を必要とする子どもがいる事例
- ケース3 必要な養育を家庭で受けていない子どもがいる事例
- ケース4 授業の内容と方法に不満を持つ子どもがいる事例
- ケース5 いじめなどの問題行動への適切な対応が遅れた事例
- ケース6 校長のリーダーシップや校内の連携・協力が確立していない事例
- ケース7 教師の学級経営が柔軟性を欠いている事例
- ケース8 学校と家庭などとの対話が不十分で信頼関係が築けず対応が遅れた事例
- ケース9 校内での研究や実践の成果が学校全体で生かされなかった事例
- ケース10 家庭のしつけや学校の対応に問題があった事例

当然のことだが、学級崩壊は複合的な要因で起きるものであり、生じる原因は一つに特定できないと思う。そのことを承知の上で、自身の学級崩壊の原因を考えてみようと思う。

私が1年目赴任した学校の規模は全校児童600名弱と中規模校である。市内の中心にある学校であり、学力は高めである。学級崩壊は、私が赴任する1年前に5年生の1つの学級で発生しているが、基本的には落ち着いた学校であると聞いていた。私が担任した5年生の学年団は、40代の男性教諭、30代の女性教諭と新任である私の3名である。私の学級には週に2回初任者指導の教員が入ってくださることになっていた。4月に学級開きをした時の印象は、静かでしっかりした学級だというものであった。私の話を物音たてずに聞いており、学級には特筆すべき大きな問題は見当たらないように思われた。新任ということもあり、指導が難しい子どもは、他の2名の教諭が受け持ってくださったようだった。学級は順調に動き出したように思われた。学級が上手く機能しない状態を自覚したのは、夏前であった。私の考えを素直に受け入れられない姿が目立つようになる。授業に集中できていない雰囲気がある。子どもたち同士の関係がうまくいかなくなっている。学級からそのような感じを受け、少しずつ焦りを覚えていた。しかしながら、それは気づくのが遅かっただけであり、そのつまずきは既に4月学級開きの直後より始まっていたと思う。その原因は大きく分けて4つあったように思う。

① 問題行動への対応

つまずきの一つが問題行動に対する私の対応である。記憶に残る二つの事例から、どこに問題があったのかを振り返ってみる。

〔事例1〕

4月の中頃に、A児（男児）が休み時間に、泣きながら戻ってきた。聞くと、学級の数名の子が遊びに入れてくれないという。そこで、その名前が挙がったB児・C児・D児などから話を聞くと、確かに遊びに入れていなかった。しかし、E児はAがルールを破ることが多くて嫌なのだと訴えてきた。私は遊びに入れないという行為が集団で行われていており悪質であると判断し、A児がこれからルールを破ることがあれば私に言うこと、しかし遊びに入れないということはおかしいという指導をした。双方が納得したかを確認して話を終えた。しかし、B児・C児・D児は全く納得しておらず、彼らは理不尽に自分たちが怒られたと考えた。そして、彼らは「チクった」A児を恨み、仲間に入れるどころか、ますます避けるようになり、年度末にはいじめへと続いていくこととなる。私への不満は抱いたものの、その気持ちは表面的には出すことがなかったため、私は気づくことが遅れてしまった。

〔事例2〕

5月中頃にH児（女児）が教室で泣いていると報告を受けた。数名の女の子から、からかわれたという。内容は、履いている靴下が前の日と同じものだという内容であった。以前から自

分の方を見て笑ったり、噂話をしていたりする雰囲気があったが、限界が来たのだという。グループに話を聞くとH児の被害妄想だという。結局、Hの感じている嫌な気持ちと言いたいことがあれば直接言って欲しいということを、Hからグループに伝えさせた。グループの子たちは、自分たちも悪いところがあったと述べて和。解した。しかし、泣いて教師を頼ったということで、H児は益々孤立を深めていくこととなる。H児も、教師に相談したことにより、状況を悪化したということから、私が尋ねても「大丈夫です」としか言わなくなっていく。

私が行った対応の問題は明らかである。第一に、大きくなり表面的なものになるまで、問題に気づくことができていなかった、対応できていなかったということ。第二に、児童の心情に寄り添うことなく、表面的な解決に終始しているということ。第三に、怒られた側に自分たちの敵だと思わせてしまっているということである。

どんな順調に見える学級でも多かれ少なかれ問題が起こるものであると思う。その問題を解決する中で、子どもたちとの関係が良くなっていくか、悪くなっていくかは、クラス経営にとって大きな要因だろう。私は、問題の解決を図る度に子どもたちの信頼を失っていった。最初は、相談しにきていた子どもたちも、相談しないようになっていき、傍観する子どもたちが増えていき、指導される子どもは私の言葉に耳を傾けなくなっていく。私が「ひいき」をすることということが、最初はささやかに、後には大っぴらに言われるようになっていた。その結果クラスの秩序、子ども同士の信頼は乱れ、教師の注意・叱責は効果が無いという状態へと陥ってしまった。

② 授業

「学校で過ごす時間の大半は授業時間であり、授業時間を大切にしなければならない。」この言葉は、大学院でよく耳にする言葉であり、私も理解をしていたつもりだった。しかし、本当の大切さは分かっていなかったと言わざるを得ない。ふりかえると授業もまた学級崩壊につながる大きな要因であったと思う。自身の授業について子どもたちがアンケートで書いてきたことから省みてみたい。

□先生の授業は面白くない

アンケートで一番出た意見が「面白くない」であった。私も当然のことながら「面白い」授業を目指してきた。例えば、ロールプレイや例え話、写真や映像を駆使する、実物を持ってくるなどである。飽きさせないように、自分で考えられる工夫を考えていた。最初のうちは、子どもたちは喜び、好意的な反応だった。私は有頂天になった。しかし、だんだんと反応が悪くなり、手は挙がらなくなった。授業中の子どもの表情や雰囲気が沈んでいるようなものとなっていった。

私は子どもたちが授業に求めるものを見誤っていた。子どもたちは、短絡的な楽しい活動

を入れれば喜ぶというものではなく、成長したいと思っている。成長が実感できる授業こそが面白い授業だということである。アクセントとして工夫を入れることは大切であるが、大切なことはどのような力をつけるかである。そのことを間違っていた。子どもはこのような工夫した授業をすれば、喜ぶのだろうなどという発想は子どもと授業をなめている発想であった。心より恥ずかしい間違いであった。

□無駄話が多い

1年目の授業のふりかえると教師の話す時間が多く、子どもが受け身でいる時間が多かったと思う。どうしても教師だけが話している時間が増え、退屈そうな顔を増やしてしまった。近年、アクティブラーニングということが言われ、思考が活性化するような授業が求められているが、全くと言ってよいほど行うことができなかった。経験もなかったし、授業研究の時間も足りなかった。毎日の仕事に追われ、授業について考える時間を後回しにしていまい、指導書を前日に読んだだけで授業を行ってしまうことが多くあった。授業は時間をかけて研究すると、教師の話す言葉・発問が精選されるが、考えられていない授業になると教師が説明する時間が増えてしまう。無駄な話が多かったのだと思う。

□正しくないことを言う

私が少しでも字を間違えると罵声がとんだということを書いたが、授業において教師への信頼感はとても大切なことだと思う。教師が完璧でないことは子どもたちも知っており、一つ間違えたからといって信頼の全てがなくなるわけではない。しかし、子どもたちは教師から正しいことを教えてもらいたいと思っているし、尊敬したいと思っている。漢字や教科に関する知識、音楽や体育の実技などで失敗や間違いを重ねていくと当然ながら信頼が失われていく。1年目として仕方がない部分も多かったと思うが、子どもたちはこの先生に教わっていて自分たちは成長できるのか不安に思ったことだろう。

学校で過ごす時間の大半は授業時間である。授業時間の質が教師への信頼に大きく関わることは間違いないと思う。大学院時代に生徒指導力と授業力どちらが重要かということを討論したことがあったが、今から考えると意味のない議論であった。その二つは分けることができないものだろう。私は授業力が不足していたことから、子どもたちの信頼を少しずつ失った。このこともまた学級崩壊につながったと思う。

③ ルールの徹底

「先生は日によって言っていることが違う」「前はこれを良いと言っていた」「人によって怒り方がちがう」。これらのことは私が実際に子どもに言われたことである。教師の指導にぶれがあると、児童はルールを守らなくなっていく。なぜ、私はそう思われてしまったのかとい

うと、一つ一つのルールを守らせる理由をもっていなかったからだと思う。はっきりとした理由があり、納得できるルールであれば子どもも受け入れる。なぜ、そのことを守る必要があるのか、子どもの10倍も考えておかなければ、指導する言葉に説得力が出ない。そのことが分かっていなかったし、できていなかった。

また、一度教師がこの学級では、このルールを守るということを宣言したならば、守らせなくてはならない。守らない姿を認めてしまい、ルールが形だけになってしまうと、この学級のルールは守らせなくて良いということを教えたことになってしまう。私の学級でも、4月当初に筆箱の中身についてルールを定めたが、いつの間にか適当になってしまい、学年の最後には守っている子どもの方が少ないという状態になってしまっていた。そうなってしまってから、指導をしようとしてももはや手遅れであった。その他にも、週に一回クラス遊びをするなどの決めごとでも徹底できなかった。

④ 教師としての魅力

どんなに正しいことを言っている、この人の言うことだけは聞きたくないと思ったことはないだろうか。学級崩壊した学級の教師は、子どもたちにとってそのようなカテゴリーに入れられてしまう。そうになってしまえば、どんな素晴らしい実践も効果をもたなくなってしまう。逆の場合もあり、この人のいうことは何でもまねしたいと思えることもある。その差は、教師としての信頼感や魅力によるものだと思う。

これまでに見てきた、「問題行動への対応」や「授業」「ルールの徹底」などにおいて、私は信頼を得ることができなかった。また、魅力という点でも欠けていたと言わざるをえない。「若い教師は上手にできなくても一緒に遊んでいたら大丈夫」と言われたことがある。そのようなことはないと思うが、一部真実をついている部分もあると思う。子どもは教師が人間として好きならば、ある程度の実力不足や失敗は許してついてきてくれると思う。

魅力とは何か一言では言えないが、言動や、見た目や服装、心のもちょうなど全てだろう。当時の私は子どもたちにとって、あこがれられる存在にはなれなかった。

以上4点に分けて、学級崩壊の原因について考えてきた。学級崩壊は調査によると、小学校に多いという。それは、学級崩壊が教師と子どもとの間に起こる事象だからだと思う。中学校や高校に比べて、小学校はほとんど全教科を担当が受け持つこととなる。そのため、学校にいる多くの時間を、担任と子どもで過ごすこととなる。授業や問題行動への対応などで一度信頼が崩れてしまうと、次々と他のこともうまくいかなくなり連鎖的に崩れてしまうのだと思う。当然のことながら、保護者や地域といった他の要因もあるが、私の学級の場合は、崩壊の主原因は私であったと思う。

4. 採られた対策とその結果

学級で私への信頼が薄れているのは、学年主任をはじめとした他の教師も早々に気づいてきており、対策が練られた。そこで、採られた対策の詳細とその結果がどうであったのかを紹介したい。

① 話し合い

他の教員のアドバイスに従い、子どもたちに思うことを書かせ、それを元に話し合いを行った。子どもたちからは、私の人間性や、授業や指導への不満が大量に出てきた。そして、それをもとに子どもたちと話し合いを行った。教室の後ろには初任者指導員が立ち会った。そして、私は子どもたちに謝罪をするとともに、子どもたちと成長したいと思っていること、不満に思っている点を直したいと思っていることを伝えた。そして、子どもたちと直すことを約束した。①授業で同じ子ばかりを当てない、②怒る前に事情を聞く、③授業時間を守る、④テストを次の日には返す、などである。

私は子どもたちの約束を守ろうとした。例えば、授業で同じ子ばかりを当てないように、表に正の字を書いて回数まで数えた。しかし、子どもたちは納得しなかった。事情により、守れなかった1回などを取り上げ、約束破りだと言い、関係はますます悪くなった。約束が増えるたびに、私は行動の規制が増えていき、疲労感が増えていった。もし完璧に守れたとしても、子どもたちの不信感や求めるものは、もっと深いところにあり、きっと満足することはなかったと思う。

② 授業改善

授業に対する不満も出ており、自身も必要性を感じていたため、授業の改善に努めた。具体的には、教師が話す時間を減らし、子どもが活動する時間を増やすことを心がけた。必ず、板書計画をたて、中心発問を精査するようにした。また、管理職の提案により一週間に一度指導案を書き、授業を見に来てもらうようになった。やはり、こだわって考えた授業は、子どもたちも集中して授業を受けており効果は感じられた。しかし、改善したとはいえ崩れだした流れを止めるまでにはいかなかった。学年の最後には、次々と起こる問題行動への対応に放課後を使わないといけなくなり、教材研究にさける時間がとれなくなった。週に一度の指導案も大きな負担となっていった。

③ 他教職員との連携

学校の教職員に多くの場面で助けていただいた。まず、時間を作る工夫をしていただいた。例えば、私が子どもの問題行動へ対応している間に、他の学級の教員に学級を見てもらう。また、学年で行う授業を増やすことなどである。初任者指導の教員に授業をしていただくこともあった。これらのサポートは大変助かった。時間を作っていただくことで、心の余裕まで戻っ

てくるようだった。

また、アドバイスを多くの教職員からいただいた。管理職に学年団、生徒指導主任、他の学年団の先輩方、多くの教職員の方々が本当に心配してくださり、経験や方法を話してくださった。本当にありがたい話であった。アドバイスを聞くことによって、学級の状態が一部好転することもあった。しかし、うまくいかないことの方が多かったように思う。その一つが、教師のバックボーンがあってこそその実践であるのに、その表層だけを見てまねをしてしまうということである。例えば、体育が得意でずっとラグビーをされていた男性教諭の真似をして指導を行ったことがあった。口ぶりや態度も似せて、指導をしようとした。ただし、その教諭は私には見えていない、気遣いや人間関係を作る努力があったにも関わらず、そのことを理解せずに形だけ真似してしまった。しかも、その指導には理由をしっかり説明できるだけの哲学がなかったため、子どもの心に入る指導になるところか、その浅はかさを見抜かれてしまい逆効果となってしまった。

また、たくさんのアドバイスをいただきすぎて、整理できず指導に一貫性がなくなってしまうということがある。学級崩壊を起こしている教師は、基本的に自信を喪失しているので、なんでも受け入れようとしてしまう。しかし、アドバイスする教師それぞれに指導哲学が違うので、アドバイス全てを受け入れようとする、矛盾が起きてしまう。また、自分がどうしたいのかという思いが見えなくなってしまうように思う。その他にも、正直に言って対策会議をするよりも、他の仕事をしたい。眠らせてもらいたいと思うこともあった。

最後に、子どもへの指導に入っていたいただいたこともあった。当時の私は、学年主任や管理職が自分で解くことができなかった人間関係を整理する姿を魔法を見るように感じていた。確かに、指導をしていただくと一時的に様々な問題は解決された。指導された子どもたちは、指導していただいた先生方を失望させないように、怒られないように頑張るようになった。そして、困ったら、その先生方のもとへ相談に行くようになった。しかし、指導に入ってください、助けていただければいただくほど私の存在は学級や子どもたちにとって必要ないものになっていった。一人では何もできない教員という烙印を押され、保護者や子どもたちの信頼を失い、いただいた多くのアドバイスも生かせず、自分を見失ってしまっていた。

5. 教師の精神状況

本筋とは関係がないかもしれないが、その当時の私の精神状況をふりかえりたい。学級が崩壊してくると、当然向けられる視線や言葉は厳しいものとなる。それに対し、最初のうちは負けてなるものか、どうしたら学級を良くできるかを考えていた。いつかは立て直せるという希望もあったし、その自信もあった。しかし、失敗の経験が続き、保護者から責められたり、謝ったり、他の教師から叱責される。そして何より、子どもたちの否定的な反応を重ねて浴びているうちに、受け止めるキャパシティがなくなってしまうのを感じた。他の教員が助けてくださっていることでさえ、周りから見張られていると感じ心の負担となり、朝に頑張ろうと

思っていた気持ちが、雲散霧消していくのを感じた。結果、教室に行きたくない、子どもに会いたくない、職員室に戻りたくない、他の先生に会いたくない、保護者に会いたくない、人と会いたくないという、ないないづくしになってしまっていた。家に帰るとくたくたに疲れているのに、目を閉じてても学校のことが思い出され、寝ると次の日になってしまうことが耐えられず寝ることができなくなった。休日になると、眠っているわけでもないのに全身から力が抜けてベッドから起き上がれなかった。辞めたいと思うことはしょっちゅうだった。ただ、辞めることだけはしないでおうとどうにか思うことができた。おそらく来年はもつことはないが、辞めてしまうと学級の子どもたちを完全に否定してしまうことになるし、子どもたちの一生の傷になると考えたからだ。

一年間が終わった時に、私を学生時代から知る先生に肩に手を置かれ「おつかれさま、よく頑張ったね」と言われた時、私は人生で一番というくらい号泣した。そして、二度とこのような学級の終わりを迎えないように、もう一度子どもとの関わり方について学び直そうと決意した。

6. 学級崩壊を防ぐために

学級経営のゴールはより高いところにあり、崩壊しないということではない。しかし、崩壊しないということは、学級が機能するということである。最低限の基準として学級が機能する方法を探ることは、より良い学級を築く方法を考えることにつながると思う。自分のうまくいかなかった経験をもとに、現在行っている方法について考えたい。

① 学級のあり方

これまでも取り上げてきた通り、学級崩壊の多くは学級担任との間に起こる問題である。学級担任という一番近い存在に対して、一番反抗的な態度をとることが多い。それは担任に分かってもらいたいという子どもの心理と、期待が高いことによる失望の大きさによるものだと思う。まず、学級のあり方を見直したい。一言で言うならば、担任に全てを依存する学級経営をしないようにすることである。例えば現在では、大切なルールは子どもたちと話し合いながら決めることを大切にしている。もちろん、そこには教師の意図があるが、自分たちで決めたルールは守りたいという意識が高くなり、子ども同士が注意できる関係になる。そのためには、その考え方の根本となる学級開きが重要となってくる。最初にどれだけ、この学級は教師の学級ではなく、自分たちの学級であり、自分たちが問題を解決していくのだと思えるようになるかが鍵となる。担任に依存した学級は、うまくいくかどうかは担任次第なのでピンチに脆いといえる。教師の存在感が薄く、それでも教室の中に民主主義が失われず、自分たちで動くことができる学級が現在の理想である。

② 教師の人間性

担任が第一の環境であるということはよく言われる。担任が常に見られている存在ということとは、意識し続けなくてはならない。挨拶に掃除、職員室の人間関係、言葉遣い……全てのことが厳しい目にさらされている。子どもは鋭く、矛盾を突いてくる、もしくは言葉にならない形でその不信を示してくる。では、どのような人間が求められるかのだろうか。渡邊尚久(2014)は「学級担任には、父性である厳しさ、母性であるやさしさ、そして子性であるやさしさが必要です。」と言っている。父性はルールや正義に厳格である姿、母性は相手を受け止めて包み込む姿、子性は無邪気に楽しむ姿と理解している。全てを完璧にバランス良く兼ね備えた教師になることは難しい。そこで、自分がどのように見られるのかを分析してみた。すると、自分は冷たく見られることが多く、父性が過剰であり、子性・母性が欠けて見られることが分かった。そこで、意識して相手に母性を感じられるようにした。ありのままの自分を見てもらおうという考え方（自己開示）ではなく、教師としてのペルソナをかぶる（自己提示）という方法である。特にこだわったのは、話の聞き方である。効き方のノウハウ本やカウンセリングの本を読んだり、セミナーに参加したりして、相手が受け入れられていると感じられる接し方を研究した。もちろん、バランスがとれた人間を目指す努力も必要だが、私は人間性は急には変わらないと考えているので、変える努力をしつつ、演技することも大切であると考えている。

③ 授業

面白いと感じられる授業については、先項で詳しく述べている。知的で活動のある授業を目指し続けることは大切なことである。1時間ずつの授業が、学級崩壊の予防になるだろう。現在私は学習内容に加えて、学び方を意識している。例えば、討論や学び合いを意識して授業に取り入れるということである。討論に慣れることで、学級の問題に対しても話し合う子どもを育てることができる。また、学び合いを取り入れることで、助け合う子どもを育てることができる。継続して1年間行っていると、授業の形も学級のあり方となっていく。また、誇りある学びということも大切であると感じている。学級崩壊する子どもたちは共通して自信がない。学んだ成長をどれだけ実感できるか、その実感を味わうことができる機会を意識して作ることが必要なのだと思う。例えば、年度当初に綺麗になる前の字を保管しておく、100ます計算の時間を記録するといった小さなことでも良いと思う。ビデオで学級の様子を記録しておくこともおすすめである。

④ ルール

一つのルールについて説明できるか見直すことが大切である。教師がルールだから仕方ないであるとか、周りの目を気にして守らせようとするすると直ぐに見抜かれてしまう。小さなルールの指導を行っていると、いたちごっこになってしまう。その裏にある基本的な考え方をどれだ

け早いうちに理解させることができるかが勝負どころとなる。また、ルールを守らせるなら、徹底することも大切である。見逃すとルールはどんどん大切なものではなくなってしまう。誰がいつやっても、見逃さず指導することができればルールは大事なものになっていく。その他にも、迅速に対応することも心がけている。直ぐに指導せずに時間がたつと、指導の効果は薄れてしまう上に、問題を複雑にしてしまう。

そして、このことが学級崩壊から学んだ大きなことの一つであるが、子どもは怒る教師が嫌いでないということだ。厳しい指導に対して反発する形もあるかもしれないが、現在の子どもたちを見ていると不安や孤立があり、かまってほしいということから発生する反抗が多いように思う。子どもに対し正面からぶつかり指導をすれば、伝わるものがあることが多い上に、後々残るものも多いと考えている。

⑤ 他の教職員との連携

学級崩壊状態の時、私は心を閉ざしていた。心は傷つき、誰とも学級について話したくなかった。今は一緒に子どもについて話をするようにしている。悩みであったり、愚痴を言ったりすることによって心が落ち着くこともある。また、他の教師から思ってもいなかった視点を聞いたり、知らなかった子どもの姿を聞いたりすることもある。何よりも、先輩教員から学べることが多い。また、早めに管理職に問題を報告しておくことが必要である。ただし、自分をもっていないと余計に混乱してしまうのは、先述の通りである。また、大人は常に見本になると思うので、良い雰囲気 of 職員関係を子どもたちに見せることは、何よりの学級崩壊予防になると思う。

⑥ 教師の心のもちよう

教師の心が健康であることは何より大切だろう。いくら良い実践をしていても、身を削り過ぎてしまうと最終的に子どもに悪影響が出ると思う。一番しんどい時、私の顔は能面のように表情が作れていなかった。そんな私が教室に入っていっていたことは、子どもたちに失礼なことである上に、酷なことであったと思う。最善の実践ができるように、努力することはもちろん大切だが、やるべきことはやったからには仕方がないという思い切りも必要だと思う。

また、本当にしんどい時は休まなくてはならない。その勇気も大切になってくるだろう。

7. おわりに

今でも当時のことを夢に見る。当時の学校の校区を通ると、子どもたちに出会ったらなんと言えよいいのか、また嫌なことを言われるのではないか、保護者に出会ったらどうしよう、冷ややかな目でみられるのではないかと今でも考えてしまう。

ただ一番の被害者は子どもたちだということは間違いないだろう。未熟な自分のために、大事な一年間を楽しい日々にはできなかった。また、毎日不安に思いながら学校に送り出してくだ

さった保護者の方々について考えると申し訳なくて辛い。私はこれまでの人生にないほどの悪態を受けた。それは矛盾しているが、全て「先生こっちを見てくれ」「先生なんとかしてくれ」「先生がんばってや」という叫びだったと思う。これを受け止められなかった自分に悔いばかりが残る。今ならば異なる指導ができる自信がある。しかし、その自信は、一年目に今まで見えていなかった自分の弱点や醜さ問題点が認識できた一年があったからということ間違いはない。当時の思いと学びを一つも忘れることなく、これからの実践につなげていきたい。本稿が少しでも、他の教員や教員を目指す方々の助けになることがあればと思う。

引用文献

- 学級経営研究会「学級経営の充実に関する調査研究（最終報告書）学級経営をめぐる問題の現状とその対応-関係者間の信頼と連携による魅力ある学級作り-」2000年。
- 梶間みどり・菊池栄治・小松郁夫・杉本真由美・由布佐和子「学級はいかにして機能するのか-全国公立小学校校長・教員調査-」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』（53）2001年 pp.164-169。
- 角田豊・片山紀子・内田利広『生徒指導と教育相談』創元社 2009年。
- 文部科学省ホームページ「いわゆる「学級崩壊」について-『学級経営の充実に関する調査研究』（最終報告）の概要-」2000年。
- 片山紀子『入門生徒指導-『生徒指導提要』をふまえた新しい生徒指導のあり方』学事出版 2011年。
- 吉益敏文・山崎隆夫・花城詩・斎藤修・篠崎純子『学級崩壊-荒れる子どもは何を求めているのか-』高文研 2011年。
- 山田洋一・渡邊尚久他『THE学級崩壊立て直し』明治図書 2014年。